礼拝の構造について

＜第一部：求道者のための礼拝＞

【入祭の部】

１．前　　奏
この世を旅してきた私たちが、神の国に入るためには、心を改めなければなりません。前奏を聞きながら、心を神に向ける準備をします。

２．あいさつ
司式者「わたしたちの父である神と、主イエス・キリストからの恵みと
　　平和が、あなたがたと共にありますように。」
会　衆「また、あなたと共にありますように。」

キリストが弟子たちに出会った時、初めにこの挨拶をしていますし、パウロの手紙の冒頭には必ずこの挨拶をしています。そこで互いに挨拶をし、平安を祈ることから始めます。ユダヤ教では「シャローム」といいます。

３．讃　　美
神を賛美します。その日の祭りに合わせて讃美歌は選ばれます。

４．開会の祈り
司式者が代表して祈ります。カトリックでは集会祈願と呼んでいます。礼拝のために祈る祈りです。礼拝は公同のものなので、個人のことは祈りません。最初に、三位一体の神を讃美。次に一週間の感謝と懺悔を告白します。礼拝に招いてくださったこと、聖霊がこの礼拝を満たし、導き、私たちの心を照らし、耳を開き、主の言葉が分るようにしてくださるように聖霊を呼び求める祈りをします。礼拝に来られない者のため、全世界の教会の為にも祈ります。最後には、三位一体の神に栄光を帰して終わります。つまり、《感謝》《ざんげ》《礼拝のため聖霊を呼ぶ祈り》《とりなし・嘆願》《頌栄》を入れるようにします。都島教会では《公同のざんげの祈り》がありませんので、司式者は、ここで必ず《ざんげの祈り》を入れるようにします。

５．詩編の交読

詩編を用いて祈り、心を神に向けます。詩編は祈りであり、旧約時代から歌われてきました。ここでは交互に唱えることをします。司式者と会衆で交互に歌うのをカノンといいます。

【み言葉による礼拝】

６．聖　　書
普通は3か所、旧約聖書、使徒の手紙、福音書から朗読します。

７．讃　　美
ここでの讃美は福音書に対する応答として「応答唱」が歌われます。「ハレルヤ」「グロリア」などです。

８．教　　話
説教です。

９．使徒信条（ニケア信条）
説教を聞いて、教会の公な信仰である信条をここで告白します。使徒信条は正式にはローマ洗礼信条といって、6世紀くらいにまとまりました。最も古く、世界の教会で公に告白されている信条というのはニケア・コンスタンチノポリス信条です。（381年）

＜第二部：信者のための礼拝＞

ここから礼拝の第二部、つまり信者のための礼拝が始まります。昔はここで求道者は退出しました。それをラテン語で「ミサ・エテ・エステ」といいます。そこから聖餐礼拝のことをローマンカトリックではミサと呼ぶようになりました。ここで求道者のために「主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の交わりがあなたがたと共に」という祝福をしました。本来なら、祝祷はこの位置にきます。正教会の礼拝ではここの位置に来ています。

【聖なる交わり】

１０．奉　　献
昔はここで奉献者はさまざまな献げ物を祭壇に運びました。今でいう献金です。もともとはこの位置にありました。今では礼拝の最後に来ています。
その中からパンとぶどう酒を選んで聖餐に用い、行列をなして祭壇に運びました。その時に讃美歌２１の８１番の聖餐の歌を歌います。キリストの葬りを記

憶し、天使の歌を歌うこともあります。

１１．教会の祈り（連祷）

ここで教会は、全世界の人のため、上に立つ指導者のため、教会のため、病人のため、苦しんでいる人のために執り成しの祈りをします。それは献げたパンとぶどう酒（イエス・キリストの型）が、自分たちのためだけでなく、全世界の人のために献げられていることを意味しています。

１２．平和の挨拶

司祭「主の平和がありますように。」
会衆「主の平和がありますように。」

昔はここで司式者は手を洗い、互いに接吻しました。これは主の聖餐を受ける前に、互いに相手を受け入れ赦しあわなければならないからです。聖書の中にも「あなたが祭壇に供え物を捧げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したら、その供え物を祭壇の所に置いて、まず行って、兄弟と仲直りし、それから帰って来て供え物を捧げなさい。」（マタイ 5：23～24）とあり、パウロも「あなたがたも聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい」（ローマ 16：16、１コリント 16：20）と言っています。

●「次に輔祭は呼びかけます。『お互いを歓迎しなさい。そして互いに口づけしましょう。』その口づけが普通の友人によって教会の外で行われる口づけに似ていると考えてはなりません。そういうものとは違って、この口づけは、互いに魂を結び合わせ、互いにすべてのわだかまりをなくすことを考えているのです。…口づけは和解であり、聖なるものです。」

※これは、エルサレムのキュリロスの『洗礼志願者のための秘儀講話』より抜粋したものである。この講話は、348 年にエルサレムの聖墳墓教会で行われた教理講話の記録である。以下、四角で囲った引用部分は、すべてこの文章からの引用である。

１３．讃　　栄

ここから聖餐式に入ります。聖餐は、「あいさつ」「スルスムコルダ」「序唱」「聖なるかな」「奉献の祈り」「聖霊を呼ぶ祈り」「招き」「パン裂き」「感謝祈祷」から構成されています。

《**あいさつ**》

司祭「主がみなさんと共におられますように。」
会衆「また、あなたと共におられますように。」

《スルスムコルダ》
司祭「心を高く上げましょう。」
会衆「主に向って上げています。」
司祭「主に感謝しましょう。」
会衆「それは正しくなすべきことです。」

●次に主教が呼びかけます。『心を上へ』。まさしくこの最も厳粛な時に、心を上へ、神へと向けるべきであって、下へ、世俗や地上の出来事に心を向けてはならないのです。…現世的な不安や家での煩いをすべて捨て去って、慈悲深い神へと、天に心を向けるのです。そしてあなたがたは、それに同意して肯定の答えとして『心を主に向けます』と答えます。…次に主教は『主に感謝しましょう』と言います。…次にあなたがたは『それはふさわしく正しい』と言います。

《序唱》
天地創造から、人間の堕落、旧約時代からキリストの降誕による神の救いを記憶する祈りです。

《聖なるかな》
天にいる天使や会衆を記憶して、天使セラフィムの歌「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」（イザヤ６：2～3）を歌います。讃美歌２１の８３番です。

●「私たちもセラフィムのこの聖なる讃美に合わせて、天の軍勢とともに唱えるのです。」

《奉献の祈り》
キリストの十字架、葬り、復活、昇天を記憶し、パンとぶどう酒を奉献する祈りをします。その時、最後の晩餐の時、キリストが言われた「制定の言葉」をいいます。「主は、引き渡される夜、パンを取り、それを裂き、感謝の祈りを唱え、弟子たちに与えて・・・」「同じようにして杯を取り・・・」

《聖霊を呼ぶ祈り》
ささげた供え物が、聖霊によってキリストの体と血になるように祈ります。

●この霊的讃歌で自らを聖化した後で、私たちは慈悲深い神が、供え物に聖霊を遣わすように願います。それは、パンをキリストの体に、ぶどう酒をキリストの血にするためです。というのも、聖霊が触れたものはすべて聖化され、変容するからです。

《とりなしの祈り》

●次に、霊的ないけにえ、つまり、血を流さない礼拝の後で、贖罪のいけにえの所で、私たちは、諸教会の平和のため、この世の平穏のため、諸王のため、軍隊と同盟軍のため、病気の人々のため、苦しんでいる人々のため、要するに、助けを必要とする人々のために、私たち全員が願いをささげ、このいけにえを捧げます。次に、死の眠りについている人々のためにも祈ります。まず族長、預言者たち、使徒たち、殉教者たちです。…
多くの人が以下のように言っているのを私は知っています。罪があろうとなかろうと、この世を去った魂にはそれが何の役に立つのかと。それでは、ある王が自分に刃向かった人々を追放し、その後で彼らにつながりのある人々が冠を編んで、罰を受けている人々のためになるようにそれを王に差し出すならば、処罰が緩められることがあるでしょう。それと同様に、私たちもまた、死の眠りについている人々のために、たとえ罪人のためであろうとも、神に願いを捧げるのです。

１４．主のいのり

主の祈りは、もともとは信者の祈りであって、求道者には洗礼の時に教えました。だからこの祈りは陪餐の前に祈りました。古くからこの位置にあります。

１５．主の聖餐（陪餐）

●その後、主教が『聖なるものは聖なる人に』と言います。目の前に置かれたものが神聖であるのは、聖霊の訪れを受けたからです。…次に『聖なる方は一つ、主なる方は一つ、イエス・キリストです』とあなたがたは言います。その後で、神的な旋律であなたがたを聖なる秘儀の交わりへと招く歌を聞いて下さい。『味わい、見よ、主の恵み深さを』（詩編 34：9）と歌われています。判断を身体的な喉にではなく、ゆるぎない信仰に委ねなさい。というのも、口にする際にあなたがたはパンとぶどう酒を口にするのではなく、キリストの体と血のしるしを口にするからです。前に出る時に…王を迎えるように、左手を右手に対する王座のようにして（左手で右手を支えて）、手をきれいにしてキリストの体を受け取り「アーメン」と言いなさい。…少しもなくさないように注意しなさい。…誰かがあなたに砂金をくれたとします。すると少しもなくさないで損をしないように注意して、できるだけ注意深くしっかりと保持するのではないでしょうか。そうであれば、金や宝石よりも価値あるものを一かけらもなくさないように、いっそう注意を怠らないことがありましょうか。…キリストの体を拝領した後で、血の杯の方へと進みなさい。手を身体から離さないで礼をし、信仰と畏敬を込めて「アーメン」と言い、キリストの血を拝領して浄められなさい。湿り気がまだ唇にあるときに手で触って目や額やその他の感覚器

官を浄めなさい。…以上の典礼伝統を汚すことなく保ち、己が躓くことのないように守り切ってください。交わりから遠ざかってはならず、罪の汚れによってこの聖なる霊的秘義から離れてはなりません。

【応答と派遣と祝福】

１６．讃　　美

神に感謝をして讃美を歌います。

１７．感謝の献物

本来は、奉献の前ですが、今は最後にきています。

１８．栄光の讃美

三位一体である神を賛美する歌を「頌栄」といいます。「讃詠」というのは詩編や聖書の歌を歌うもののことをさしています。ここでは三位一体である神を賛美し、神様の御名をたたえます。

１９．派　　遣

礼拝は終わり、信者はこの世へ派遣されて行きます。昔のプロテスタント教会では、派遣という考えはありませんでした。これは他教派の礼拝を学んだことにより最近では用いられています。讃美歌２１の中には、多くの派遣のスタイルがのっています。

司祭「主は言われます。わたしは誰を遣わすべきか。」
会衆「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」
司祭「ハレルヤ、平安のうちに、主と共に行きましょう。」
会衆「ハレルヤ、主のみ名によって、アーメン。」

２０．祝福の祈り

祝祷のことです。これもいろんな種類があります。

２１．後　　奏

●エルサレムのキュリロス『**洗礼志願者のための秘儀講話**』より聖餐の説明。348 年～350 年にエルサレムの聖墳墓教会で行われた教理講話の記録であり、キリスト教古代における最も貴重な宝の一つと言われている。

「パンについてキリストご自身がはっきりと「これは私の体である」と明言されたのですから、誰がその言葉を疑うことなどありましょうか。そしてキリストご自身が「これは私の血である」と断言されたのですから、いったい誰がそれは血ではないなどと言って疑いをはさむことなどありえましょうか。かつてガリラヤのカナで、自らの力によって水をぶどう酒に変えたのですから、ぶどう酒を血に変えることが信じるに値しないことがありましょうか。…
パンのかたちでキリストの体が与えられ、ぶどう酒のかたちでキリストの血が与えられているのですが、それは、キリストの体と血とに与ってキリストと一つの体となり、一つの血となるためです。…そのようにして、聖ペトロが言うように「神の本性にあずかる者」（Ⅱペトロ 1：4）になるのです。
かつてキリストはユダヤ人とやりとりをして次のように言いました。「私の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない」（ヨハネ 6：53）。彼らは霊的に語られたことを理解せず、つまずいて離れ去りました。救い主が人喰いを勧めていると思ったからです。…
従って、それらが単なるパンやぶどう酒であるような態度をとってはいけません。というのも、主の宣言によって、それらは体であり血であるからです。実際、感覚だけでもそう思われるかもしれませんが、信仰によってそのことを確固たるものにしなくてはなりません。…
見かけのパンが味においてはパンであるにしてもパンではなく、キリストの体であり、見かけのぶどう酒が味はぶどう酒であるにしてもぶどう酒ではなくてキリストの血であること…」

●ローマの聖ヒッポリュトスの『**使徒伝承**』215 年頃書かれたものから抜粋。

・「教師が教話を終えると、求道者は信者たちと離れた所で祈る。」
・「祈りの後、教師は求道者の上に手を置いて祈ってから解散させる。」
・「求道者は 3 年間神のことばを聴かなければならない。しかし熱心でよく専念する者の場合は、期間で判断させるのではなく、その人の生活態度によってのみ判断される。
・「祝福のさいはいつも、次のように祈る。『栄光は、父と子と聖霊である、あなたに、聖なる教会の中で、今もいつも世々にありますように。アーメン。』」
・「信者でない者が聖体を食することがないように。皆が注意を払う。また、

ねずみや他の動物がかじったり、何かかけらが落ちたり、紛失したりしないように注意する。これは信じる人々に食されるべきキリストのからだであり、決して軽んじられてはならないものだからである。」

- 「杯を祝福した時、あなたは神の名によってキリストの御血のかたどりとして杯を受けたのである。…一滴もこぼしてはならない。」
- 「求道者は主の晩餐にあずからない。」
- 「食事の時、出席している信者は、自分のパンをさく前に、司教の手からひとかけのパンを受ける。それは主のからだのかたどりであるエウカリスティア（聖別されたパン）ではなく、エウロギア（祝福されたパン）である。」
- 「週の初めの日、司教はできる限り、自分の手で全会衆に聖体を配る。」
- 「助祭たちが司教にささげものを差し出すと、司教は司祭団とともにその上に両手を置いて、感謝をささげ、次のように言う。「主は、あなたがたと共に」一同は答える。「また、あなたの霊と共に」、「心を上に」「主に向けています。」「主に感謝をささげましょう」「それは、良いこと、正しいことです」…」
- 「試みにあう時、信仰をもって額に十字架のしるしをしなさい。…モーセがほふられた過越の小羊の血をかもいに注ぎ、入り口の柱に塗ったのは、このことの予型であった。手で額と目に十字架のしるしをすることによって、私たちを打ち滅ぼそうと試みる者を退けるのである。」